

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 3 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02662

研究課題名（和文）ビルマ文学における他者表象の史的考察～小説に描かれた日本占領期を中心に～

研究課題名（英文）The historical study of symbolization of others in Burmese literature~through Japanese Occupation written in the novels~

研究代表者

南田 みどり (Minamida, Midori)

大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・名誉教授

研究者番号：80116144

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、すでに終了した1940年代文学研究の成果に立ち、1950年代以降の日本占領期文学について、そこに描かれた日本人像や少数民族形象も含めて考察するものであった。研究期間中可能な限り収集した1950年代から70年代発行の日本占領期小説を読み込み、以下の側面から検証を試みた。第一に50年代60年代70年代の時代別に、各時代の文学的政治的状況がそれらの作品に与えた影響を検証した。第二に、そこに登場する日本人表象をいくつかの類型から検証した。第三に、60年代に登場する抗日闘争における少数民族表象の扱いの意味について検証した。第四に、戦後ビルマ語文学史の総括を著書『ビルマ文学の風景』で試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1950年代から1970年代に至るビルマ文学の通史的研究は、内外で概説程度の言及が散見された。しかし、1980年代以降、ミャンマー連邦国内においては、言論統制の厳酷化によって、文学を歴史的視点から公正かつ系統的に研究することが阻害されてきた。かつて我が国は、ミャンマーにとって最大の援助国であり、それが長期の軍事独裁を支えてきたことを指摘する声も少なくない。50年代から70年代に至る日本占領期文学の役割とそこに描かれた他者表象を考察した本研究は、研究両国の過去と現在を正しく認識し、真の友好の在り方への知見を提供し、かつミャンマー国内の文学研究の空白を埋めることで両国の友好に貢献できたと考える。

研究成果の概要（英文）：I collected novels on the Japanese Occupation (1942-45) published in 1951-1979 as much as possible, read them deeply, and achieved a measure of success as follows. First, I found they were influenced by the political and literary streams of the period. Second, especially the trends are eminent in the period of Burmese Socialism (1962-88), when the literature was required to contribute to establish socialist country. Third, there were several types of characterization of Japanese and minority races in Burma, and the latter had important function in the anti-fascist novel after 1962. But the number of novels on the Japanese Occupation reduced 1970s gradually. Burmese literary world was faced to some difficulty because of controls. I published on it not only in the thesis but also in the book "the scenery of Burmese literature - going through in the military regime -".

研究分野：ビルマ現代文学

キーワード：日本占領期ビルマ 現代ビルマの長編小説 ビルマ社会主義と文学 日本人の形象化 軍事政権とビルマ文学 少数民族の形象化 文学における史実の再編 クーデターと文学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本占領期については、現代史や政治学の分野で、内外に若干の蓄積が存在するが、文学研究は内外共に十分な業績が不足してきた。日本占領期文学は、南田みどり「ビルマ文学史における日本占領期の研究」(基盤研究(C)2009~2011 科学研究費助成事業(科学研究補助金)研究成果報告書平成24年6月7日)が一定の成果をもたらした。南田は、日本占領期に出版された文学作品を可能な限り収集し、当時の文学が果たした役割を解明し、作家協会機関誌『作家』の役割を考察し、ビルマ国内で当時活動した文学関係者のリストと出版書籍リストを作成し、今後の研究への布石とした。

(2) 続いて南田みどり「ビルマ文学史における1940年代の研究~日本占領期文学から戦後文学へ~」(基盤研究(C)2012~2016 科学研究費助成事業(科学研究補助金)研究成果報告書平成29年5月25日)がさらなる成果をもたらした。それは1945-49年に出版された文学作品を可能な限り収集し、第一に1945年のビルマ文学が日本占領期文学を発展的に継承したことを、その書き手の陣容と作品の枠組みなどから解明した。第二に46-49年文学に見られる新たな動向を解明した。第三に、この時代を代表する『ビルマ1946』(1949 テインパーミン 1914-78)の特異性を、同時代の作品群との比較において検証した。そのような流れの中で、40年代の戦後文学に登場する日本占領期小説の特徴も考察した。それによって、ビルマ本国では研究の蓄積が十分ではない40年代文学について、日本占領期文学と戦後文学の連続性をとらえなおすことによって、ビルマ文学史における1940年代の役割を検証した。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、上記の研究成果の上に立ち、ビルマ語文学の他者表象の史的考察の一環として、日本占領期を題材とした小説に焦点を当て、1950年代から1970年代に至るまでに出版された長編小説に描き出された日本占領期と日本人形象化から、ビルマ現代史における文学の役割、ならびにビルマ文学史における日本占領期の意味を検証することを主要な目的とした。

3. 研究の方法

(1) 研究は次の手順に従って進めた。第一期・年代別考察期間では、1950年代文学の日本占領期について、長編25点短編10点を収集して2017年度に論文にまとめた。1960年代文学の日本占領期について、長編41点、短編17点を収集して2018年度に論文にまとめた。1970年代文学の日本占領期について、長編22点、短編26点、短編集2点を収集して2019年度に論文にまとめた。第二期・通史的考察期間では、日本占領期を含む1930年代から1990年代までを文学史的に総括した。そして、1990年以降の軍事独裁政権の言論出版弾圧状況の報告を併せた著書をまとめ、2021年に出版した。(引用文献 参照)

(2) 研究には、現地における資料収集と聞き取りを不可欠とした。資料の保存状態の悪いものは、要点を書写する必要もあった。それらの実施に先立ち、収集済みの資料の整理、聞き取りのための問題意識の整理を行った。実施後は、収集済みの資料の読み取りと聞き取り調査結果の整理を行い、それらをもとにまとめの論文を執筆することが可能となった。2020年3月以降、現地における聞き取りと資料収集は不可能となったが、可能な方法を駆使して情報収集に努めた結果、予想を超える成果を得たといえる。

4. 研究成果

(1) 1950年代の日本占領期文学

文学状況

1950年の時点で国土は政府軍支配下の合法地帯と反政府軍支配下の非合法地帯に分断され、合法地帯では議会制民主主義が機能していた。だが53年には非合法組織との接触容疑による言論出版関係者の逮捕が増加した。52年に政府軍教育部が創刊した月刊誌『ミャワディー』は、47年創刊の『シュマワ』と並ぶ二大文芸誌として多くの作家を育てた。40年代末に生じた文学の階級性を巡る論争は、50年代も尾を引いた。作家協会執行部でもしばしば改選がなされた。1958年に第一次軍政が始まると、政治家や学生指導者と並んで小説家やジャーナリストも逮捕された。

50年代文学は40年代後半の「戦後文学」を発展的に継承した。第一に「戦後文学」の延長線上にある作品として『白い世界』(1950 ジャーネージョー・ティンスエー1917-82)等のSF小説、『鉄と血』(1951 ナンダー1919-82)等の歴史小説、『パワディー』(1953 トーダースエー1919-95)等のユーモア小説がある。第二に、『お役人』(1950 テットウ 1913-2003)や『この河』(1953 グエーリン 1912-89)等の評価の高い社会改革小説も「戦後文学」を継承したものであった。第三に、主張を排して様々な階層の人生を描写する「人生描写」小説である『マ・モウスエー』(1952 タキン・ミヤタン 1921-76)『共同体の奴隷』(1954 リンヨンティツルイン 1917-93)等が、「戦

後文学」以上の深まりと広がりを持って登場した。第四に、「戦後文学」で少数派だった女性作家の作品も、『心』(1951 ジャーネージョー・ママレー1917-82)『惨めな帰宅』(1953 チーエー1929-2016)『ムエー』(1959 キンニンユ 1929-2003)をはじめとして増加した。

50年代文学に描かれた日本占領期

日本占領期作品は、「戦後文学」に見られたような冒険と恋愛が結合した闘争小説はむしろ減少し、階級性重視派の小説、「人生描写」小説、随想風小説、人情的恋愛小説など、多様な潮流の中に再現された。時代設定から分類すれば、第一に『霞む銀の霧』(1951 パモー・ティンアウン 1920-78)『憎きにあらず』(1955 ジャーネージョー・ママレー前出)等のように日本占領期で閉じる作品がある。第二に、『輪廻の向こう岸』(1950 タンスエー1926-64)『かけがえなき人』(1952 コワディー・キンウー1930-)『寄る辺なき』(1957 ミンチョー1933-91)等のように日本占領期以前から以降までを舞台にする作品がある。第三に、『ケーボウタイ』(1956 タードウ 1918-91)『後悔』(1959 ヤンアウン 1914-95)等のように日本占領期のみを舞台とする作品がある。第四に、『揃ったと言えるだろうか』(1953 ミンニー1928-85)『おぼろげに』(1957 マンティン 1916-97)等のように、記憶の中の日本占領期を書く作品がある。第五に、『夜が明ける』(1952 コウコウ 1922-92)『エーヤーワディー河』(1958 タキン・ミヤタン前出)等のように、日本占領期を起点にその後の時代を描く作品がある。

日本人像

日本占領期に出版された文学は、日本軍将兵の明確な形象化を避け、ビルマ軍将兵の形象化に努めた。「戦後文学」では、占領期には許されなかった民間ゲリラ、共産主義者、英領ビルマ正規軍兵士等とともに、日本軍将兵の形象化が見られた。その大半が残酷で野卑なファシストとして描かれたが、名前と顔を持つ日本軍人も若干登場した。「50年代文学」における日本人の形象かは、画一的ではなくさらに多様化した。

第一に、『運命』(1951 テインデー1916-80)『戦争間諜』(1957 テッカトウ・サン)等のように、ビルマ人対日協力者とかかわる日本軍人の形象化が見られる。第二に、『ヨシハダ』(1954 ニンウー1922-81)のように、抗日闘争でビルマ人に殺害される日本軍人の形象化が見られる。第三に、『尊い贈り物』(1955 ポウ・ターヤー1919-93)『東より日出ずるが如く』(1958 テインペーミン 1914-78)のように民間の日本人の形象化がある。第四に、『ミスター・キタムラ』(1954 ソーウ 1919-91)『慈愛』(1956 ジャーネージョー・ママレー前出)のように、同時代である1950年代の日本人の形象化が見られる。

内戦文学

「50年代文学」が描いた日本占領期と日本人の形象かは、「戦後文学」以上の多様性を見せた。しかし、「日本占領期」という「狂気」を深く掘り下げることかなわぬうちに、文学界は内戦といういまひとつの「狂気」に直面した。「裏切り者だど!」(1950 テインペーミン前出)のような革命勢力の内部矛盾を描く作品は少数派であり、『愛するヌヌ』(1950 リンヨンニー1926-94)『ナンダパレー』(1950 テッカトウ・ナンダメイ 1922-86)等のように、共産党支配下の「解放区」への憧憬を描いた作品が多く見られた。

50年代後半には、「解放区」内の出来事や「解放区」との往来を描く作品は減少し、『知らしめよ』(1956 マウン・テインカ 1927-2005)等のように、同時代の合法社会における闘争の描写に重点が移った。その登場人物には文学関係者が多い。内戦は、日本占領期の三年をはるかに超える期間ビルマの大地を地に染めた。現在に至るも、死者の数は公式に表明されていない。内戦の一方の当事者である反政府軍内では、1989年の共産党壊滅後もいくつかの少数民族軍が消長を繰り返しながら戦闘態勢にある。もう一方の当事者であるビルマ軍は、日本占領期と内戦という二つの「狂気」の時代を生き抜け、強大化していった。その前身であるビルマ独立軍は、日本軍特務機関が創設し、それを継承したビルマ防衛軍は日本軍が指導した。占領期に日本の士官学校に留学した幹部も少なくない。日本軍国主義の亡霊がビルマ軍の中に再生し、「狂気」の時代の再現に一役買ったといっても過言ではあるまい。(引用文献 参照)

(2) 1960年代の日本占領期文学

文学状況

1960年、国土は合法地帯と非合法地帯に分断されたまま、合法地帯では議会制民主主義がつかの間復活した。しかし軍は政府に統治能力がないとして1962年にクーデターを起こしビルマ社会主義への道を発表し、銀行、工場、学校等を国有化し、外国語新聞社をも閉鎖して、排外主義的色彩を強める。63年の反政府軍との和平交渉決裂後は、大量の逮捕者が出た。作家も例外ではなかった。彼らは文学にビルマ式社会主義建設への貢献を義務付けた。議会制民主主義下で花開いた様々な文学の中で、60年代はSF小説、ユーモア小説、同時代の社会改革小説や、労働者・農民の闘争小説は減退した。「内戦文学」は姿を消し、主張を排して様々な階層の人生を描写する人生描写小説や、少数民族を主人公とした小説が増加した。ビルマ民族主義を強調する歴史小説、大河小説、医学小説、心理小説、自伝的私小説など多様な純文学が登場し、娯楽小説も多数出版されて一見文学界は活況を呈した。なかでも多く出版されたのが、日本占領期に言及した小説であった。

60年代文学に描かれた日本占領期

時代設定から概観すれば、第一に、日本占領期以前に始まり占領期で閉じる作品は『羅刹』(1964 ミンチョー1933-91)1点である。第二に『わが祖国』(1961 キンスエーウー1933-2019)

『歴史が語るだろう』(1961 ティンサン 1917-95)等占領期以前から以降を舞台とする作品がある。第三に、『赤地の中の白い星』(1964 チョーアウン 1929-2000)『死の鉄路にて』(1963 リンヨン・ティルイン 1917-93)等、日本占領期のみを舞台とする作品がある。第四に、『闘い取った一粒の涙』(1963 ヤンゴン・バスエー 1916-86)『紡ぐが如く創る』(1967 キンスエーウー前出)等、戦後あるいは同時代を舞台に記憶の中の日本占領期に言及する作品がある。第五に、『来たれ曙光』(1961 リンヨンニー前出)『同志アウンディン』(1962 バモー・ティンアウン前出)等、日本占領期を起点にその後の時代を舞台とする作品がある。これら60年代の日本占領期関連作品では、戦後文学や50年代文学に既に存在した娯楽性の強い恋愛小説やアクション小説はやや減少した。共産党員中心の闘争小説は消滅し、ビルマ軍関係者を主要人物とする作品が増加した。さらに、50年代同様、主張を明確にしない人生描写小説や随想風私小説の枠組みで書かれた作品も少なからず存在した。

日本人像

戦後文学とくに45年小説に登場した日本軍人には、野卑、残酷、色情狂など戯画化された者から社会主義信奉者までが見いだせた。さらに50年代文学には民間人や同時代日本人も登場し、紋切り型ファシストから反戦平和を求める者まで、その像は多様化した。60年代の大多数の作品における日本人は、登場が分散的でおおむねファシストの権化としての役割を果たすにとどまったが、幾つの特筆すべき日本人像が見いだせる。否定的人物としては、「歴史的負債」(1962 ティンサン・バトゥエー 1932-80)の私怨からビルマ人通訳を拷問した通称「ちびすけ将校」、『闘争の呼び声』(1965 テーマウン 1927-)の拷問で殺害したビルマ人の首を収集する将校ウエノ等、狡猾、残酷、悪徳日本人が見いだせる。肯定的人物としては、『勝利の旗翻り』(1962 ボウ・ターヤー前出)のビルマ軍人と愛し合う女性軍医シズカ、『フィン』(1963 マ・レーロン 1935-91)で抗日秘密活動家を見逃すが抗日部隊との戦闘で戦死する将校トーサン、『土地奴隷の息子』(1964 マウン・ネーウィン 1930-91)で反戦を語る士官学校教師ムラタ等である。60年代の日本占領期小説は、厳酷な闘争小説、風刺的悪漢小説、恋愛小説、民族友好小説恋愛活劇小説などで、多様な日本人像を見せた。肯定的日本人像は50年代より増加した。肯定的日本人の死は、反戦平和を強調するとともに抗日闘争に陰影を与え、否定的日本人形象ともあいまって、闘争の栄光を補完する役割を果たした。しかし、日本人にもまして重要な役割を与えられたのは少数民族形象であった。

他者表象としての少数民族像

60年代ビルマで共産軍に次ぐ強大な反政府勢力はカレン軍であった。カレン族形象としては、戦後文学と50年代文学に若干見いだせたが、異色であった。60年代は大幅な増加が見られた。第一に多いのは、『命・血・汗』(1961 リンヨン・ティルウイン前出)『山地の闘い』(1963 バモー・ティンアウン前出)等の民衆レベルの民族友好を謳った作品である。第二に多いのは、『涼期』(1963 ヤウンニー 1931-85)『3月27日』(1966 テッカトウ・ハンウィンアウン 1936-)等の連合軍136部隊員と少数民族女性の恋愛を扱った作品である。第三は、『血の河は溢れ』(1964 ミャワズィ 1921-93)『緬曆12月』(1966 ティンサン前出)等、ビルマ軍人が指導する抗日でカレン族との共闘を描く作品である。これら抗日闘争を称える異民族小説は、異色作の枠を超え、他の少数民族小説と共に分断社会における民族友好という同時代の課題にこたえようとした。

虚構による史実の再編

分断社会の60年代ビルマ文学界で日本占領期小説は主要な潮流の一つとなった。主要人物の中で多数を占めたのは第一にビルマ軍将兵であり、第二に少数民族であった。ビルマ軍将兵を主要人物とする日本占領期関連小説は、戦後文学で長編14点短編1点、50年代は長編7点と短編2点と少数だったが、60年代は長編17点短編3点と増加した。抗日統一戦線の今一つの主力だった共産党が非合法地帯に追いやられた分断社会で、そしてビルマ軍が政権を握った60年代において、ビルマ軍将兵を形象化して軍主導の抗日を強調することは、軍の対日協力を隠蔽し、軍こそ抗日の立役者であるという神話を構築した。

また他者表象としての少数民族形象の多くが作中でビルマ族と友好的に連帯したが、現実にはビルマ族と少数民族の抗日教頭は希少であった。日本占領期にはビルマ軍によるカレン族虐殺も生じ、ビルマ族文化至上主義と非ビルマ族別紙の情意も増幅されて、戦後の問題に連なった節がある。虚構に例外的な共闘を練りこむことは、読者に占領期の民族友好が現実にも多数存在したかの幻想を与える。それは「歴史を題材とした安易な虚構の、現実には及ばず危険な反作用」にほかならない。社会主義という軍事独裁政権は、抗日闘争におけるビルマ軍主導と民族友好という二つの神話の構築によって史実再編に挑んだ。(引用文献 参照)

(3) 1970年代の日本占領期文学

文学的状况

70年代の合法地帯では住民が慶勢停滞による生活破壊に呻吟し、学生による圧政への抵抗も続いた。逮捕を逃れて「解放区」に入る若者も後を絶たなかった。74年には形式的「民政移管」が完了するが、76年にはネーウィン大統領暗殺未遂事件が生じるなど、政権内部でもひびわれが起こった。文学への統制は強化された。74年憲法に基づき75年ごろから事前検閲が始まった。79年には事前検閲の手続きを詳細に定めた「文学とマスメディアに関する原則」が発行された。文学界の第一の変化は、60年代に受賞者多数を出した国家的文学賞の小説部門受賞状況に現れた。長編部門は73年、75年、76年、79年、短編部門は73年、77年、79年の受賞作が空白となった。作家たちが執筆を手控え、水準を充たす作品が枯渇してきたためでもあった。第二の

変化は、人生描写小説の増加である。その書き手には女性作家が多かった。第三の変化は、厳しい検閲にもかかわらず、恋愛ものやアクションものなど大衆娯楽小説多数が、出版許可されたことである。作者は女性名が多いが、男性ゴーストライターの手になる作品が大半であった。人生描写女性作家の活躍とも相まって、70年代から80年代は「女性作家時代」とも揶揄された。

日本占領期小説の変化

第四の変化は、そうした動きの中で、日本占領期小説が文学界の主要な潮流の座を撤退して、軍の「健闘」を称える作品が、「愛国小説」とも呼びうる潮流として派生しつつあったことである。ビルマ軍を抗日の主力となす小説は『我が民族国家』(1973 タキン・ミヤタン)『鮮血の叫び』(1973 ボウ・ターヤー前出)等であり、軍と少数民族の共闘を描く作品は『鳴り響く勝利・震える悲しみ』(1971 タントウンティツ 1938-)『新緑芽吹き夏に酔う』(1977 ボウ・ターヤー前出)等である。「愛国小説」の潮流では、時代背景が戦後に移動しつつあった。そして、反政府軍と闘い国家を「分裂」から守る政府軍の役割を強調する作品が次第に増加してゆく。このほか、『轟然と』(1973 タキン・ミヤタン前出)『自由な邸宅』(1974 アウンリン 1928-84)等民間人の抗日闘争を描く作品や、『油田の女キンキンデー』(1970 マウンテインサイン 1939-2006)『比丘ダンマウィラータ』(1971 リンヨン・ティッルウイン前出)等人生描写的に日本占領期を描く作品も登場し、前述の「神話」との距離を置いて、地道な存在を示した。

特異な日本人像

70年代の日本占領期小説の他者表象のうち、少数民族形象は60年代より減少した。一方日本人は、日本占領期小説に不可欠な形象として存在し続けた。70年代作品で顔と名前を持つ日本人の大半は、ケンペイタイ将校であった。しかし彼らの中には、50年代60年代の作品に見られたような主要人物は存在せず、その登場も部分的で、掘り下げには乏しかった。群を抜いた日本人形象は『血』(1973 ジャーネー・ジョー・ママレー前出)のユミであった。作者は、彼女を容姿端麗・裕福・聡明・家事能力抜群に加えて、ビルマ人も舌を巻くほどビルマ文化に造詣が深い人物として創造した。作者はまた、その異母弟を、日本人の子として貶められた経験から日本人の血を憎み、ファシズム侵略と闘った軍への入隊を志願する大学生として創造した。そして母にも似たユミの一途な愛と異母弟の憎悪を並立させる。

作者はまた、豊富で正確な日本関連知識を作品にちりばめつつも、ユミを歴史認識の欠如した人物として創造する。そしてユミに、ビルマ人は戦争時の出来事を過去のものと思わず位までに日本人に憎しみを持っている、日本人は原爆を投下したアメリカを恨まず仲良くやっている、日本人は野蛮ではなく、信仰心が厚く、謙虚で文化的な民族だと異母弟とその恩人の大学教師に語らせる。作者はむしろ異母弟の認識を変化させる。彼は抗日記念日に高名な詩人の詩を読み、日本の民衆の戦争被害に思いをはせ、歩み寄りの兆しを見せる。(引用文献 参照)

おわりにかえて

南田は研究期間に上記のほか、ミャンマー国内の雑誌で日本文学を中心とするビルマ語評論を発表し、それを収録した評論集を出版している。(引用文献)さらに、80年代から2020年の日本占領期小説に関してまとめの作業にも入っていることをも付け加えておく。

<引用文献>

南田みどり、ビルマ文学の風景 軍事政権下に行く、本の泉社、2021、337

南田みどり、虚構による史実再編のゆくえ 70年代の日本占領期関連小説、世界文学、No.131、2020、30-38

南田みどり、虚構による史実再編の時代 ビルマ60年代文学に見る日本占領期、世界文学、No.129、2019、47-55

南田みどり、1950年代のビルマ文学と日本占領期、世界文学、No.127、2018、82-89

Minamida Midori, Nejjame Solitude hnit Acha Hsaungbanya, Moedwin Sarpay, 2018、121

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 南田みどり	4. 巻 No.212
2. 論文標題 不服従の民に寄り添って	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本翻訳家協会	6. 最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南田みどり	4. 巻 第3号
2. 論文標題 分断を超え真の連邦国家へ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 戦前外語社研究会会報	6. 最初と最後の頁 3-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南田みどり	4. 巻 No.303
2. 論文標題 空飛ぶ本たちと不服従者の書棚	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本近代文学館	6. 最初と最後の頁 3-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Minamida Midori	4. 巻 No.1
2. 論文標題 Ryu hnit Patthetywe Phyeswetchinzayadwe	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Tokyo Decandence	6. 最初と最後の頁 326-333
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南田みどり	4. 巻 No.115
2. 論文標題 ビルマ文学に現れた日本占領期—文学的抵抗とのかかわりで	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東南アジア学会会報	6. 最初と最後の頁 8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南田みどり	4. 巻 131
2. 論文標題 虚構による史実再編のゆくえ 70年代ビルマの日本占領期関連小説	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 世界文学	6. 最初と最後の頁 30-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南田みどり	4. 巻 No.129
2. 論文標題 虚構による史実再編の時代—ビルマ60年代文学に見る日本占領期	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 世界文学	6. 最初と最後の頁 47-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南田みどり	4. 巻 ISSUE4
2. 論文標題 Lady Chatterlay i Chitthu Jpapr hnaik Lethkan Pon	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 HNINSIPHYU	6. 最初と最後の頁 147-160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 南田みどり	4. 巻 127
2. 論文標題 1950年代のビルマ文学と日本占領期	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 世界文学	6. 最初と最後の頁 82 - 89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南田みどり	4. 巻 116
2. 論文標題 彼らはなぜロヒンギャを語らない?	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 世界文学ニュース	6. 最初と最後の頁 2 - 4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南田みどり	4. 巻 Vol.6 No.2
2. 論文標題 AKUTAGAWAhsu Yadhaw Thetkyi Kalaungdhit Hsayama Hnit yauk	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 WCDI	6. 最初と最後の頁 60-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南田みどり	4. 巻 ISSUE2
2. 論文標題 Japan Sittha Sayehsaya Hino Ashihei hnit Patthet ywe Phyeswetchetmya	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 HNINNSIPHYU	6. 最初と最後の頁 124-135
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南田みどり	4. 巻 No.36
2. 論文標題 現代ビルマ文学における抵抗の系譜	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 季論21	6. 最初と最後の頁 181 - 192
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南田みどり	4. 巻 No.204
2. 論文標題 激動を駆け抜けた作家テインペーミン(1914-78)ーその軌跡が語るもの	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本翻訳家協会	6. 最初と最後の頁 3-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南田みどり	4. 巻 No.5
2. 論文標題 Murakami Haruki Naukhsan Wuthtushegyi "Tathmu Thatkyin" hnit Patthet ywe	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Ninn Si Pyu Journal	6. 最初と最後の頁 40-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南田みどり	4. 巻 No.8
2. 論文標題 Japan Naingngan hma Hsu Hnit-hsu Yadhaw "Lanza Pawbyi"	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Ninn Si Pyu Journal	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 南田みどり
2. 発表標題 ビルマ文学に現れた日本占領期 文学的抵抗とのかかわりで
3. 学会等名 東南アジア学会研究集会「ミャンマー情勢を読み解く－歴史のなかの現在、比較のなかの地域」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 南田みどり
2. 発表標題 ビルマ文学と歩んだ半世紀
3. 学会等名 箕面国際フェスティバル
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 南田みどり
2. 発表標題 世界の中のビルマの人権
3. 学会等名 人権ライブ23
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 南田みどり
2. 発表標題 ビルマ文学の風景に見る抵抗の系譜
3. 学会等名 大阪民衆史研究会 1月例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 南田みどり
2. 発表標題 日本占領期とビルマ文学～他者表象の行方を追って
3. 学会等名 世界文学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 南田みどり
2. 発表標題 終わらぬビルマの戦後～長編『ビルマ1946』（1949）の今日的意義
3. 学会等名 日本翻訳家協会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 南田みどり	4. 発行年 2021年
2. 出版社 本の泉社	5. 総ページ数 337
3. 書名 ビルマ文学の風景 軍事政権下をゆく	

1. 著者名 南田みどり	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Moedwin Sarpay	5. 総ページ数 188
3. 書名 Ko-hnitsa Wuthudomya	

1. 著者名 Midori Minamida	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Moedwin Sarpay	5. 総ページ数 121
3. 書名 Nejame Solitude hnit Acha Hsaungbanya	

1. 著者名 南田みどり	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Moedwin Sarpay	5. 総ページ数 253
3. 書名 Ma Pan Khet Japan hma Badhapyansodhaw Yane Myanmar Anyothami Wuthtudo Baunggouk	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------